

● 講演

日本のキリスト教大学 ― 過去と現在

梅津順一

目次

1. はじめに
2. キリスト教大学の現状
3. 宣教師による教育 ― キリスト教学校の萌芽
4. キリスト教学校の成立
5. キリスト教学校と国家主義の衝突
6. キリスト教大学設立への模索
7. 戦後日本のキリスト教大学
8. 日本のキリスト教大学の特徴
9. 今日の課題

キーワード

キリスト教 (Christianity)
大学 (University)
日本 (Japan)
戦後 (Post-War Period)
国家主義 (Nationalism)
宣教師 (Missionary)

The Christian College in Japan: A Historical Sketch
by JUNICHI UMETSU

1. はじめに¹⁾

メソジスト関係学校のリーダーシップを担っておられる皆様に前に、講演の機会を与えられ、大変光栄に思っております。アメリカ人は講演をジョークをもって始めるが、日本人は言い訳から始めるといわれます。私も日本人でありますので、最初に言い訳から始めなければなりません。それは、本日の主題は私の専門領域とは言えないことです。私は教育学、教育史の専門家でも、キリスト教学の専門家でもありません。私は社会学ないし社会思想史に属しておりまして、マックス・ウェーバーの観点から、17、18世紀のイングロ・アメリカ社会におけるプロテスタンティズムと社会の関係を研究してまいりました。17世紀のピューリタンの指導者 Richard Baxter (1615-1691) について研究したことがありまして、1660年の王政復古ののち、非国教徒となったバクスターは、ロンドンでは Samuel Annesley の教会に出席したようでありまして、おそらく Annesley の娘、Susana、すなわち John Wesley の母親を知っていた可能性があります。私の研究がもっともメソジストに近づいたのは、おそらくこの時点ではないかと思えます。

そういうわけで、私の研究とメソジスト学校との関係は決して近いとは言えないのですが、私自身日本におけるプロテスタンティズムと社会について関心を持ち続けておりまして、一大学人として日本におけるキリスト教学校、キリスト教大学の役割について、折に触れて考えてきました。私はこの機会に、日本のキリスト教大学の歴史を振り返り、現在の課題を考えたいのであります。2009年に日本のプロテスタント伝道は、150周年を迎えました。日本の外交政策が鎖国から開国へと転換する中で、キリスト教の禁制も解かれて、アメリカから宣教師が日本にやってきて、福音の伝道とともに西洋式の教育活動が繰り広げられました。では、日本ではプロテスタントの教育活動がどのように展開したのか、そこにはどのような特徴があるのかを、考えてみることにしたいと存じます。

まず、最初に申し上げておかなければならないのは、ここでいうキリスト教大学と

1) この原稿は、第2回 I AMUSCU (メソジスト関係学校国際同盟) 日本加盟校カンファレンス (青山学院、2012年6月1～2日) の2日目に行われた基調講演を再録したものである。

いいものは、キリスト教学校教育同盟に加入している大学で、事実上、プロテスタント系大学を指していることです。日本のキリスト教大学としましては、カトリック系の大学もあるわけですが、今回の報告では除かれております。今回の会合にとっては、メソジスト系大学が重要なわけですが、よりひろくプロテスタント系大学を取り上げることにしました。メソジスト系大学に限りますと、大学の数が大変少なくなつてまいりますし、メソジスト系大学は他のプロテスタント系大学と共通するところが多く、一括して取り上げることができるよう考えられます。

2. キリスト教大学の現状

現在、キリスト教学校教育同盟に加盟しているキリスト教大学がどれぐらいあるかと申しますと、55大学あります。日本では、国立大学、公立大学、私立大学あわせて、およそ750の大学があり、そのうち私立大学の数が約600近くあります。私立大学は、大学数でも、学生数でも80パーセント弱を占めております。キリスト教大学は、全体で10パーセント弱、私立大学の中では十数パーセントにあたります。これは、日本のプロテスタント人口が人口比で0.5パーセント未満ですから、驚異的な数字といわなければなりません。日本では、プロテスタント教会は社会に定着しているとはいえないのですが、プロテスタントの学校、大学は社会にある地位を得ていることになります。

ただし、日本のキリスト教大学といっても、そこにはかなり多様な大学が含まれています。キリスト教大学の現状を知るには、いくつかの視点から、分類して捉えておくことが必要となります。

●規模別の分類

第一に、規模別に大学进行分类してみますと、次のようになります。すなわち、1万人以上の学生数を擁する大学が7校あります。青山学院大学、同志社大学、関西学院大学、関東学院大学、明治学院大学、立教大学、東北学院大学であります。

次に、5000人から1万人未満の大学が、5校あります。同志社女子大、金城学院大学、桃山学院大学、桜美林大学、西南学院大学の5校です。

次に、2500から5000人未満の大学が9校。フェリス女学院大学、北星学院大学、茨城キリスト教大学、神戸女学院大学、国際基督教大学、宮城学院女子大学、名古屋学院大学、酪農学園大学、聖学院大学、東京女子大学です。

1500から2500未満が、9校。梅花女子大学、福岡女学院大学、広島女学院大学、恵泉女学院大学、盛岡大学、西南女学院大学、四国学院大学、神戸松蔭女子学院大

学、東洋英和女学院大学。

さらに、800 から 1500 未満が、10 校で、梅光学院大学、中部学院大学、弘前学院大学、活水女子大学、共愛学園前橋国際大学、聖隷クリストファー大学、尚絅学院大学、静岡英和学院大学、山梨英和大学、神戸国際大学と続きます。

さらに、800 未満が 13 校ありまして、長崎ウェスレヤン大学、福岡女学院看護大学、北陸学院大学、敬和学園大学、九州ルーテル学院大学、松山東雲女子大学、長崎外国語大学、沖縄キリスト教学院大学、大阪女学院大学、プール学院大学、ルーテル学院大学、三育学院大学、東京基督教大学、東京神学大学があります。

大学の数からいえば、キリスト教大学は地方の小さな大学が多いといわなければなりません。

●設立年別の分類

のちにも触れますように、それぞれのキリスト教大学は歴史的淵源をたどると、多くの場合、宣教師の私塾に行きつきますが、ここでは日本の教育制度の中で大学として認可された時期に注目して区分してみますと、次の四つの時期にまとめられます。

第一は、第二次世界大戦以前、戦前の大学制度の中で認可された大学であります。戦前から大学であったキリスト教大学は多くはなく、同志社大学（1920 年認可）、立教大学（1922 年）、関西学院大学（1932 年）の 3 校であります。

したがって、今日のキリスト教大学の大部分は、戦後に大学となったのですが、戦後も、戦後改革期、新しい教育制度の中で認可された大学が 11 校あります。青山学院大学、広島女学院大学、関東学院大学、国際基督教大学、神戸女学院大学、明治学院大学、東北学院大学、同志社女子大、金城学院大学、西南学院大学、東京女子大学、東京神学大学であります。

戦後の日本社会は、人口の増大と経済成長にともなう生活水準の向上を背景に、大学進学者が増えていきますが、戦後の大学設立の第二の波は、1960 年代におとずれました。戦後すぐに出生した人々、いわゆる第一次ベビーブーム世代への対応として、大学が設立されたわけで、キリスト教大学では、梅花女子大学、梅花学院大学、フェリス女学院大学、弘前学院大学、北星学院大学、茨城キリスト教大学、宮城学院女子大学、桃山学院大学、名古屋学院大学、桜美林大学、酪農学園大学、ルーテル学院大学、四国学院大学、神戸松蔭女子学院大学、神戸国際大学の 15 大学であります。

次の波は、第一次ベビーブーム世代の子どもたちの大学入学に合わせて、1980 年代後半から 90 年代前半中心に多数の大学が設立されました。この第二次ベビーブーム世代に対応して設立されたキリスト教大学としては、福岡女学院大学、活水女子大

学、恵泉女学院大学、敬和学園大学、松山東雲女子大学、盛岡大学、聖学院大学、西南女学院大学、聖隷クリストファー大学、東洋英和女学院大学の10大学がそれに相当します。

次に、1995年以降に設立された大学がありますが、これは人口数の増加というよりも大学進学率の上昇に対応したものといえます。この時期に設立された大学は、中部学院大学、共愛学園前橋国際大学、九州ルーテル学院大学、長崎外国語大学、長崎ウェスレヤン大学、福岡女学院看護大学、北陸学院大学、沖縄キリスト教学院大学、大阪女学院大学、プール学院大学、三育学院大学、尚絅学院大学、静岡英和学院大学、山梨英和大学、東京基督教大学の16大学となります。

●地理的な分布

こうしたキリスト教大学は、地理的に言えば、圧倒的に都市部に集中しているといえます。東京、横浜などの首都圏には13校、京都、大阪、神戸などの関西都市圏に10校、それに100万を超える札幌、仙台、名古屋、福岡・北九州地区には数校あり、それほどの大都市ではなくとも、弘前、金沢、日立、長崎、新潟、前橋、熊本など、20万を超える都市にキリスト教大学が立地しています。日本の国立大学は、地理的には比較的均等に分布しています。これに対して、キリスト教大学を含む私立大学は、大都市圏に集中しています。したがって、キリスト教大学は消極的に言えば、人口と比較して数が少ない国立大学の空白を埋める役割を果たし、積極的に言えば都市の中間層の子弟の教育に従事したといえることができます。

●女子大学の比率が大きい

もうひとつ、現在のキリスト教大学の特徴として、女子大学の比率が高いことを指摘しておかなければなりません。日本の国立大学は82の4年制大学がありますが、そのうち女子大学は2校しかありません。これに対してキリスト教大学55校のうち、17校が女子大学です。とくに、比較的小規模の大学、比較的新しく設立された大学、大都市圏よりも、地方の都市に立地をもつ大学が女子大学である場合が多い。日本では、伝統社会では教育といえば男子が中心であって、近代化とともに、キリスト教学校が女子教育を積極的に担ってきた経緯があります。

3. 宣教師による教育——キリスト教学校の萌芽

近代化に先立つ徳川幕府の支配のもと、17世紀はじめから250年ほど、日本ではキリスト教は禁止されておりました。それ以前の16世紀には、イエズス会をはじめ

カトリック教会の伝道が進展し、西洋との貿易活動も行われていたのですが、徳川幕府はスペイン帝国の進出に対する警戒感からキリスト教を禁止し、外国貿易もごく限られた範囲でしか認めず、鎖国政策をとっておりました。アメリカのペリー提督による砲艦外交によって、徳川幕府は1854年に和親条約を締結し鎖国政策を放棄したのですが、1858年の通商条約によって貿易が開始されると経済的社会的混乱が生じ、政治的動揺を招き、徳川幕府が崩壊して、天皇を統合のシンボルとする明治国家が設立され、日本は積極的に近代化に取り組む国家として再出発することになります。

新政府はキリスト教の禁制を直ちに廃止することはありませんでしたが、通商条約が外国人居留地におけるキリスト教活動の自由を保障したことから、宣教師の来日が相次ぐことになります。その宣教師たちも日本人に向けて自由に伝道ができたわけではなく、1859年に来日した最初の伝道師の一人ヘボン、医療に従事して日本人に知られるようになりました。そのヘボンの妻のクララが日本人に依頼されて英語を教えたのが、宣教師による教育活動の最初と考えられています。ですから、それは学校というよりも個人の家庭での非公式的な教育でした。日本ではそれを塾と呼びますが、宣教師の周りには、さまざまな塾ができてキリスト教教育の萌芽が見られたことになります。

幕末から明治にかけて、日本人が宣教師に対して、宗教的な偏見に囚われず、英語の知識、さらには西洋文明の知識をもとめて積極的に接近したことは、日本の特徴といえます。有為の青年が個人的に宣教師を訪ねただけではありません、政府高官も宣教師から学ぼうとしまして、たとえば、長崎で教育に従事したオランダ改革派の宣教師フルベッキは、大隈重信などの教え子たちが明治政府の高官になったことから、明治政府の顧問として重用されています。フルベッキは明治政府に西洋諸国への使節団を提言したことでも知られますし（岩倉使節団として実現）、当時の日本唯一の大学、東京大学の形成にも重要な役割を果たしました。

青山学院の日本人初代の院長、日本メソジスト教会の初代監督本多庸一は、この時期に文明の知識をもとめて横浜の宣教師を訪ねた一人です。この間の事情は本多庸一の次の文章から知ることができます。本多は弘前藩の武士で、明治維新の時期には若手の指導的立場にありましたが、新しい時代の息吹を感じ、新しい時代に対応するために、横浜に向かったのです。

「1868年に王政復古が起こり、開国が国策となり、全国民が日本を世界の列国と並ぶ強力な国家にするには、西洋文明を採用する必要があることを理解しました。この理由で、西洋の言語と学問を修得しようと、日本各地から数百人の青年が、宣教師の

もとにやってきました。これは宣教師にとっては、単なる言語と学問の知識よりもっと良いものを彼らに与える、摂理というべき糸口となりました。そう、彼らは他の何よりも、青年たちに聖書を与えようとしていました。時は満ちていました。多くの青年がこの新しい教えを受容し、迫害に会いました。彼らは大義のためどんな困難にも耐え忍ぶ心構えができていました。

1872年の3月10日、最初のプロテスタント教会が、アメリカ人宣教師の指導の下で、11人の青年によって組織されました。5月最初の日曜日には、かく言う私も洗礼を受け——もう1人の青年と3人の若い女性と一緒に——生まれたばかりの教会に加わる特別な恵みを受けたのです。以来、私は特別に神の子とされたことを感謝しています。」（「私の回心」、氣賀健生著、青山学院編『本多庸一』教文館、2012年所収）

このように、当時の日本では、宣教師は「西洋文明の使者」として受け入れられ、宣教師は文明の教師として身近な人々を教える形で、教会だけでなく学校も出来上がっていきました。ここで注目されるのは、日本では最初から女子学校が多かったことですが、これは、日本の女子教育機関がなかったこともあります。日本にやってきた婦人宣教師の活躍によるものでした。当時のアメリカ女性にとって、海外宣教師は男女差別の少ない重要な働き場の場であり、婦人宣教師にとって伝道の地は、彼女たちにとって活躍のフロンティアでした。当時日本にやってきた女性宣教師の数は、男性宣教師の数を上回っていたのです。

4. キリスト教学校の成立

日本のキリスト教大学は、これら宣教師の周りにできた小さな学校を一つの源泉としています。フェリス女学院大学はミス・キダーの学校を、明治学院はブラウン塾を、青山学院大学は婦人宣教師スクーンメーカーの女子小学校を今日の大学の出発点と考えております。このことは日本のキリスト教大学の多くが、最初から大学構想があつてできたのではなく、小さな学校がなかば自然発生的に成長して大学になったことを示唆しています。のちに見るように、最初から大学構想をもって大学が設立された、東京女子大学や国際基督教大学のような例もあります。しかし、多くの場合は、宣教師が日本の人々の必要に答える形で、文明の学問を教えるなかで、より高度な教育が求められ、大学へと発展したわけです。この背景には日本人の積極的な学習意欲があり、また積極的な大学形成への貢献がありました。宣教師と宣教団体が設計して日本のキリスト教大学をつくったというよりも、宣教師と宣教師に学んだ日本人が積極的に参与して大学ができたことが日本の特徴といえるのです。

この点を具体的に示すために、この青山学院の歴史を簡単に振り返ってみたいと思います。青山学院の起源が語られるとき、必ず三つの源流が指摘されます。1874年にイリノイからやってきた、アメリカ、メソジスト監督教会婦人宣教師ドーラ・スクーンメーカーが教えた女子小学校。東京でソーパー宣教師と日本人が、英語と西洋の学問をもとめた日本人の学習意欲に応じて設立された耕教学舎、それに宣教団体が横浜に設立した美會神学校（The Methodist Mission Seminary）です。この最初の二つは自然発生的な学校といえます。

ドーラ・スクーンメーカーはわずか来日二週間で、みずからは午前中に日本語を学び、午後には数人に教えるという形で教育に携わることになりました。スクーンメーカーに協力したのは、洋学者として著名な津田仙という人物で、彼は彼女のために教室となる住居を探し、生徒を集め、実のところ、最初の生徒七人の中には、31歳の彼の妻も、12歳の長女、8歳の長男、5歳の次男もいたのです。当時の宣教師の学校がほとんど外国人居留地の中にあっただのに対して、ドーラはその外に出て、日本人社会の中で教育することを望みました。そこでドーラは仏教の寺院を利用することもしました。彼女は寺院で僧侶が読経するときには、讚美歌を歌うのを控えなければなりません。この女子小学校にはじまる女子教育が東京英和女学校、青山女学院となり、男子系の青山学院と合同し、女子高等教育にも携わっていくことになります。

1879年に横浜の居留地に設立された美會神学校は、神学科と普通科（英学と漢学）に分かれ、聖書、神学、英語、地理、歴史、物理、それに漢学が加えられていました。この神学校が東京に移転するとき耕教学舎と合同して、東京英和学校、Tokyo Anglo-Japanese College が成立します。これは、一面では、アメリカのボルティモア在住の牧師でかつ教育者ガウチャーによる Anglo-Japanese University プランの実現でもありました。ガウチャーは以前より、日本にキリスト教の高等教育機関を設立することを提案し、資金的な援助も惜しみませんでした。実際、ガウチャーの資金的な援助によって、現在のこの青山キャンパスが取得され、校舎の建設がなされました。ガウチャーはメソジスト監督教会の牧師を二十年務めたのち、教育事業と外国伝道に献身しました。1889年にはボルティモア女子大学を設立しただけでなく海外の伝道・教育事業に多くささげました。中国福州の英華学校 Anglo-Chinese College、天津の病院のため、朝鮮伝道のため、インドの小学校のためなど、多額の献金がささげられました。

この時期、宣教師の教育活動を支えた代表的日本人が先にも触れた津田仙です。津田は幕末の開国の時期に蘭学と英学に志し、幕府がアメリカに派遣した使節団に通訳

として同行した経験もありました。明治維新後は日本最初の西洋式ホテル、築地ホテルに関与し、西洋野菜の栽培にも取り組んでいます。津田は日本の西洋式農業の開拓者の一人であり、かつその娘、6歳の梅子をアメリカに留学させたことでも知られます。西洋の社会と学問に接するにつれてキリスト教に関心を持っていた津田は、ソーパー宣教師によって洗礼を受け、先に述べたスクーンメーカーの女子小学校をはじめ、さまざまなプロテスタントの教育事業を支えたのでした。津田のような日本の文明化を担う堅実な日本人信徒によって支援されたことも、日本のキリスト教学校の特徴といえます。

5. キリスト教学校と国家主義の衝突

このようにメソジスト監督教会に支持された学校が、1883年にこの青山の地に校舎を建てて、東京英和学校（後に青山学院と改称）として再出発し、キリスト教学校の基礎が築かれました。日本の学校制度との関係でいいますと、当初の宣教師による居留地での教育活動は、日本政府とはかかわりのない宣教師の私的な活動でありました。それが居留地を出て学校を設立する場合には、1879年の「教育令」にしたがって、届け出でることで私立学校が設立されました。その後1899年の「高等女学校令」「私立学校令」「文部省訓令第十二号」さらに1903年の「専門学校令」によって、明治政府が教育制度を整えるとともに、政府の権限を強化して学校の設立を認可制にし、教育内容にも制約を加えることになります。なかでも、「文部省訓令第十二号」は、キリスト教学校における宗教教育を禁止するもので、キリスト教学校にとって大きな脅威となりました。

すなわち、文部省は認可された高等女学校、尋常中学校においては、教育課程の一部としてだけでなく、教育課程の外においても、宗教上の教育を行うこと、また、宗教上の儀式（礼拝）を行うことを禁止するものでした。キリスト教学校はキリスト教を教えること、礼拝を行うことを継続するかぎり、正式の私立学校としては存立できないことになりました。正式の私立学校でなくなれば、二つの特典を失うことを意味しました。一つは、上級学校への入学資格がなくなること、そうなれば上級を目指す者はキリスト教学校には入学しなくなります。また、男子学校では、徴兵猶予の特典が失われることを意味しました。この二つの特典を失うことは学校の存続を危うくするものでした。したがって、キリスト教学校はそのキリスト教教育を放棄して正式の私立学校としてとどまるか、あるいは、二つの特典を失うのを覚悟して各種学校として存続するか、この苦しい選択を迫られたのでした。

この文部省の方針の背景として、条約改正の結果、外国人の内地雑居、すなわち外

国人が自由に旅行、居住、営業できるようになることへの対応があったと考えられます。日本政府は外国人宣教師がそれまで以上に、自由に教会建設やキリスト教学校を設立することを警戒し、私立学校を厳格に管理しようとしたのです。しかし、それも遑れば、明治国家の教育政策の根幹に、キリスト教とは相容れないものがあったことも否定できません。明治政府は1889年に大日本帝国憲法を發布し、プロイセン憲法をモデルとした立憲君主制を制定しましたが、これは日本神話の神々の血統を受け継ぐ天皇によって、人民に下賜されたものでした。しかも、同時に、天皇は教育勅語によって、天皇への忠誠を中核とする公民道德の基準を与えたのです。

こうした明治憲法と教育勅語を二本柱とする明治政府の基本方針が、キリスト教信仰と摩擦を引き起こすことはすぐに明らかになりました。いわゆる内村鑑三不敬事件です。内村鑑三はアメリカ式の札幌農学校 Agricultural College で、アメリカ人教師の薫陶のもとで、プロテスタンティズムを受け入れた人物ですが、その後アメリカにわたり、アマースト・カレッジを卒業後、ハートフォード神学校で学んで帰国し、国立のエリート高校で英語を教えておりました。その学校で教育勅語の奉読式が行われた際、内村鑑三は天皇の署名入りの教育勅語に敬意を示すのが足りない、最敬礼を怠ったとして糾弾されたのです。内村鑑三を糾弾したのは、国家主義的の学生たちで、国家への忠誠、天皇崇拝に疑義があるとして、キリスト教徒への反感を募らせていた人たちでした。

哲学者井上哲次郎は、そうしたキリスト教への反感を、「教育と宗教の衝突」、正確に言えば臣民教育とキリスト教の衝突として取り上げました。教育勅語の精神とキリスト教とは矛盾するということです。具体的には、第一に、教育勅語の国家主義に対して、キリスト教は非国家主義であること。第二に、キリスト教は国民道德の中心である忠孝を重んじないこと、君主のために命をもなげうつ忠の精神はないし、天父知って自分の父を知らないこと。第三に、キリスト教は出一世間、いわば来世を重んじて、世間、現世を軽んじていること。さらに、キリスト教は墨子の兼愛のように、無差別的であって、近くの人を愛することを怠る者であるというわけです。この井上のキリスト教批判に対しては、青山学院院長の本多庸一はじめ、多数のキリスト教徒が反論していますが、キリスト教がこの時期、偏狭なナショナリズムという大きな壁にぶつかることになりました。

6. キリスト教大学設立への模索

戦前日本の高等教育には、専門学校と大学という二つのコースがありました。1903年の「専門学校令」によって定められた専門学校は、高等工業学校、高等農林学校、

高等商業学校などのほか、医師、薬剤師の養成にあたる医学専門学校、薬学専門学校もあり、芸術系の東京美術学校、東京音楽学校も、専門学校として位置づけられていました。キリスト教学校の高等教育への模索は、最初は、「専門学校令」による専門学校としての認可を得ることであり、その上で「大学」への道を探ることでした。青山学院の場合には、「専門学校令」の翌年には、青山学院高等科と神学部が専門学校の認可を受けていますし、明治学院の場合も、ほぼ同じ時期に高等学部と神学部が専門学校の認可を受けています。

ただし、大学への道には大きな壁がありました。日本のキリスト教学校関係者は、名実ともに整った大学の設立を熱望していましたが、1910年にエディンバラで開催された世界宣教会議でも、日本に連合キリスト教大学を設立することが提案されました。その後、同提案の継続委員会委員長のジョン・モット博士が来日し、具体的な検討が進められることになります。その第一歩として、中等教育より上の教育については、個々のキリスト教学校ではなく連合した学校を設立し、その上に大学を構想することが検討されました。これを現実的に推進するには、東京でいえば青山学院と明治学院の合同を実現するものであったのですが、それぞれの歴史ある学校を合同するのは困難でこの計画は挫折することになります。

ただし、このエディンバラ会議における合同キリスト教大学設立構想は、女子大学としては結実することになりました。当時、各ミッションが支援していたキリスト教の女子学校においては、高等教育の次元では緒に就いたばかりで、比較的容易に連合することができたのです。当時日本で女学校を経営していた十の宣教団体が一堂に会して委員会を構成し、東京女子大学を設立しました。東京女子大は伝統を異にする宣教団体が協力して、最初から高等教育機関を構想し実現した点で、ユニークな位置を占めています。ただし、東京女子大学は、「大学令」による大学ではなく、専門学校にとどまっていた。

1918年の「大学令」によって、戦前に設立されたキリスト教大学は、同志社大学（会衆派）、立教大学（聖公会）、関西学院大学（メソジスト）であり、キリスト教大学としてはこれにカトリック系の上智大学が加わります。南部メソジスト教会と後にカナダ・メソジストが加わって設立された関西学院は、1889年に普通学部と神学部をもつ学校として出発し、1908年には神学部が、1912年には高等学部（文科・商科）が「専門学校令」による専門学校として認可を受けています。関西学院は青山学院にやや遅れて専門学校となったわけですが、1932年には「大学令」による大学として認可されました。

では、青山学院が、戦前に大学に昇格できなかったのに、関西学院が可能となった

理由はどこにあるのか。一つには、南部メソジスト教会の日本伝道の開始が遅かったことが有利に働いたことが考えられます。南部メソジスト教会から派遣された宣教師ランベスが日本にやってきて教育事業に着手したのは、1889年ですが、その時点で、プロテスタント教会の日本の伝道の経験、キリスト教学校の在り方について、調査と研究が行われたことが考えられます。南部メソジスト教会の伝道は当初から、それ以前の教派に比べて組織的で、教育事業への取り組みも計画的になされています。青山学院の三つの源流のように、自然発生的に発展して学校が整備されていったのではなく、初めから伝道には学校設立への明確な構想があった。設立された関西学院自体も、南部メソジスト教会の組織の中に位置づけられており、大学昇格に至る学院の運営を見ても、理事会の方針にブレがなく財政的基盤も堅実であったのです。

逆に青山学院が大学昇格に成功しなかった理由として、一つには、先にのべた教派合同の大学設立の計画もあり、単独で大学設立へと向かわせる力が削がれていたことがあります。もう一つには、1923年に関東地方を襲った大地震があげられます。この関東大震災によって、青山学院は神学部校舎、中等部校舎、大講堂、高等学部校舎は軒並み大破し、一瞬して廃墟となってしまいました。この時期、全米各地のメソジスト教会から多額の資金がささげられ、復興を遂げることができたのですが、青山学院にとって大学昇格への道は困難となっていったのです。

関西学院大学の場合は、宣教団体のイニシアティブと組織的な支持がよく働いたケースですが、他面で、キリスト教とかかわりの深い人物が、宣教団体、教会とは離れて、日本人のイニシアティブで大学の設立を試みたケースもここで取り上げてみたい。一つは、津田梅子が設立した女子英学塾（後の津田塾大学）です。津田梅子は世界的に見ても、非常にまれな生涯をおくり、優れた社会的貢献を行った人物といえます。梅子は先に、青山学院の設立の協力者として紹介した津田仙の娘で、わずか6歳にしてアメリカ留学に派遣されています。新政府が設立されて数年、日本の政府高官が、アメリカ社会における男女平等、女性の教育の高さに感銘を受け、日本の女子教育に貢献しうる人物を養成するために、5人の女性を留学させたのです。津田梅子はワシントン近郊のジョージタウンのアメリカ人宅に寄寓し、アメリカ式の教育を受けて、十二年後、18歳で帰国しています。すでに日本語も忘れていました。

その後、彼女は、1889年、25歳で再度アメリカにわたり、Bryn Mawr College オスヴィゴ師範学校などで学ぶなかで、日本の女子教育への使命を自覚するようになります。帰国後、さらに十年ほど一英語教師としてすごしたのち、1900年に、「女子英学塾」を始めました。この女子英学塾は品性高尚な英語教師の養成することを目的としていましたが、最初の生徒は10名、開校式は、梅子が務めていた華族女学校、女

子高等師範学校にならって、教育勅語にはじまり君が代斉唱で終わったのですが、その間に、讃美歌、聖書朗読、祈りがささげられました。梅子はアメリカ生活の中で洗礼を受けており、女子教育のためにはキリスト教が不可欠であると考えていたからです。津田梅子の女子英学塾は、専門学校令が公布された1903年には専門学校として認可を受け、女子の高等教育機関となっていたのです。梅子は宣教団体との関係はもたなかったとはいえ、教育の基礎をキリスト教におくことを明記し、また、学校の拡張のための資金としてアメリカ市民から援助を受けています。

7. 戦後日本のキリスト教大学

(1) 国際基督教大学の設立

1945年8月日本はポツダム宣言を受諾し無条件降伏し、アメリカを主とする連合国軍の占領のもとで、民主化政策が遂行されることになります。軍隊の武装解除をはじめとして、財閥解体、農地制度改革、労働組合の結成、婦人への参政権付与などとともに、学校教育の改革が行われ、天皇の神格化が否定され、教育勅語に代わって教育基本法が制定されました。教育基本法は、国民主権、基本的人権の尊重、平和主義の原則を基盤とする新しい日本国憲法とともに、戦後の教育行政の基準とされるようになります。大学制度においては戦前の複雑な高等教育制度を単純化し、専門学校、旧制高校、帝国大学をすべて大学として一括し、ひろく大学の門戸を開放することになります。また、私立大学の独自性も尊重する方針も打ち出され、戦後の教育政策はキリスト教学校にとっては大きな追い風となりました。

国際基督教大学の設立は、そうした戦後日本の新しい出発を象徴する事件でもありました。国際基督教大学の構想は、先に触れた、1910年にエディンバラ世界宣教会議において支持された提案を受け継ぐものでした。学問的水準の上でも、規模の点でも、帝国大学に肩を並べることのできるキリスト教大学の構想が、敗戦を機に、もう一度息を吹き返したのです。早くも1945年10月には、戦後民間人としてはじめて日本を訪問した、北米キリスト教界の代表団 Federal Council of Churches および、北米外国宣教協議会 Foreign Missions Conference に対して、日本のキリスト教指導者たちは、新しいキリスト教大学設立の必要を訴えています。そこで北米キリスト教協議会 National Council of Christian Churches に、キリスト教大学設立推進の委員会が設立され、ヴァージニア州リッチモンド長老派教会マクリン牧師の原爆投下に対するお詫びと和解のための献金の呼びかけも合流しました。1946年3月には、ICU創設委員会がメソジスト宣教本部幹事のラルフ・ディッフェンドロファーを主導者として設立されています。

日本の側でも、1946 年 12 月に明治学院で日本の代表的なキリスト教指導者によって大学設立委員会が設置されていますが、国際基督教大学の設立には、キリスト教関係者以外の幅広い人々の支持を得たことが注目されます。日本側の募金委員長には、一万田尚登日本銀行総裁が就任し、「この新しい大学は、新生日本に希望の光と力を与える精神的拠り所となるばかりでなく、国際社会で日本が立ち直る上に大いに役立つだろうし、この大学を支援することは日本国民が生き延びる道につながる」とその意義をアピールしたのです。事実、当時、敗戦後の苦しい生活状況の中で、1 億 5000 万円の募金目標が達成されたのですが、募金に応じた人々の大半 95 パーセントの人はキリスト教とはまったく関係のない人々だったのです。ICU の I にしろ、C にしろ、U にしろ、戦中の日本主義、排外思想、ファナティズムに対する、当時誰も理解できるアンティ・テーゼでした。ICU だけでなく、戦後のキリスト教学校は、占領政府の民主化政策と日本国民の民主化への期待という追い風を受けて再出発することができました。

(2) キリスト教総合大学の発展

戦前の大学制度のなかで、同志社大学、立教大学、関西学院大学が私立大学に昇格していたことはすでに述べました。これに加えて戦後改革期に十一のキリスト教大学が誕生していますが、なかでも、青山学院大学、関東学院大学、明治学院大学、東北学院大学、西南学院大学は、それぞれの設立母体である宣教団体のいわばセンター的教育機関でした。同志社—会衆派、立教—聖公会、関西学院—南メソジスト、カナダ・メソジスト、青山学院—メソジスト監督教会、関東学院—バプテスト、明治学院—合同改革派、東北学院—ドイツ改革派、西南学院—南部バプテスト、これらの大学は比較的早く、かつ初期から神学教育をその一環としてもっていました。これらの大学はほとんどが今日学生数一万人を超える総合大学であり、その伝統と規模の大きさにおいて、日本のキリスト教大学を代表する存在といえます。

これら総合大学の戦後の発展パターンを、関西学院大学を例にとってみてみると、次のような経緯をたどりました。

1946 年、法学部、文学部、経済学部。1951 年、商学部、1952 年、文学部神学科を神学部開設。1960 年、社会学部。1961 年、理学部。

(1994 年、大学設置基準大綱化)

1995 年、総合政策学部

2002 年、理学部を理工学部。

2008 年、人間福祉学部

2009年、教育学部

2010年、国際学部

以上、10学部、2万人ほどの学生が学ぶ大学となっています。

これらの総合大学のもう一つの特徴は、同一の学校法人の中に、幼稚園、小学校、中学、高等学校を抱えていることです。これは先に見たようにキリスト教大学が、宣教師の塾から積み重ねて大学に至った歴史から理解されるのですが、そうした総合学園としての性格も、日本のキリスト教学校の特徴といえるでしょう。

(3) キリスト教女子大の成立

戦前の日本で女子大学の名称を用いていたのは、先に見たエキュメニカルな宣教団体を母体として設立された東京女子大と日本女子大学の二校でしたが、この二校とも専門学校令にもとづく学校であり、国公立を含めて日本には女子大学は存在していませんでした。戦後になって、女子の高等教育機関が大学となりますが、キリスト教大学としては、東京女子大学の他に、広島女学院大学、神戸女学院大学、同志社女子大が成立しました。先に見た津田梅子の設立した女子英学塾も、戦前に、津田英学塾と改称して専門学校になっており、同じ時期に女子大学となっています。また、日本女子大の創立者成瀬仁蔵は、もともととは会衆派の牧師であり、アメリカに渡りアンドヴァー神学校に学び、アメリカの女子大学にも触れて、帰国後日本の女子教育に携わることになります。成瀬は宣教団体ではなく、当時の日本の政治家、財界人に呼びかけて女子大学の設立に尽力したが、広い意味でキリスト教の影響のもとにあったといえます。したがって、日本の女子高等教育に占めるプロテスタンティズムの影響は非常に大きいものがありました。

広島女学院、神戸女学院、同志社女子などは、戦前の時期に専門学校として認可を受けていたことから、戦後すぐに大学にスムーズに移行できましたが、戦前に高等教育レベルを持たなかったところは、戦後は、短期大学を設立し、それを充実させる形で、第一次ベビーブーム、第二次ベビーブームに対応して四年制大学を設置していきます。明治初年の横浜居留地における女子教育からスタートしたフェリスも、戦前は高等科は東京女子大に移し、戦後になって、中等部、高等部の上に短期大学を設置し、1965年に短大の一部を再編して四年制大学となった。いずれにせよ、戦後設立のキリスト教大学における女子大学の比率は高く、女子教育に占めるキリスト教学校の実績の大きさを示唆しています。

では、日本のキリスト教系女子大学の特徴を見れば、東京女子の文理学部、津田塾

の学芸学部はリベラル・アーツ・カレッジを志向していました。これに対して日本女子の場合には、家政、国文、英文の三学部体制をとっており、家政学科によって有能な家庭婦人の教育が目指されていました。小さなキリスト教の女子大学では英文科に力を入れたところが多く、また音楽学科といった芸術系の学科も特徴となっています。開明的な知性と情操教育が重視されていたことが分かります。

(4) 独立系キリスト教大学

日本のキリスト教大学の特徴として、少数ではあるが宣教団体に頼らない、日本人の個性的な指導者に推進された大学があることはすでに述べました。戦後設立された独立系キリスト教大学として注目されるのは、ひとつは清水安三(1891-1988)によって設立された桜美林大学です。桜美林大学は戦後すぐに設立された桜美林高等女学校、桜美林中学から出発し、1955年に短期大学を設立したのち、1966年に第一次ベビーブーマーが大学進学するころ創立されました。この戦後日本で桜美林学園を育成した清水は、実は戦前に北京で学校を設立した人物でもありました。清水は同志社大学神学部を卒業後、中国伝道を志したのですが、その理由が、イエール大学の卒業生の牧野虎次牧師が語った、アメリカ人宣教師ホレス・ペトキン逸話でありました。やはりイエールの卒業生であったペトキン宣教師は学校と小さな施療所を経営していたのですが、北清事変に遭遇、妻と子供を安全なところに残して、自分は羊飼いが羊を置いて逃げるわけにはいかないと、危険を顧みず現地に帰り一命を失ったのでした。

ペトキン宣教師は遺書として一通の手紙を残しました。それは母校あての手紙で、「イエールよ、イエールよ、我が子ジョンが25歳になるまでを育ててくれ、25歳になったならば、彼をしてこの地に來たらしめ、我が跡を継がしめよ」と認めてあった。これに感激したイエールの教職員、学生は、毎年、シルヴァー・コレクションとして献金を行い、イエール・チャイナ・ミッションを支援しています。清水もこの話に感激して、最初は旧満州の奉天（現在の瀋陽）にわたり、伝道とともに児童館を設立したのでした。そののち、北京に移り語学と中国事情を研究する中で、早魃に苦しむ農村の児童のための救済にも従事し、北京郊外の貧しいスラムで、女学校を開設することになります。当時、中国の貧しい家の娘は、わずかな金で売られ、小さなうちは子守に、成人したのちは妾にされたといえます。「崇貞学園」の崇貞とは、貞淑の価値、女性の誇りを呼び覚ますものでした。そのためにも、清水は女生徒たちに刺繍づくりを指導し、経済的な自立を助けたのでした。

清水は、戦後帰国し、淵野辺に土地を得て今度は日本で教育事業に携わることにな

りますが、この淵野辺には青山学院のキャンパスもあります。戦前陸軍はこの地域一帯を開発する計画があり、淵野辺周辺には製鋼会社と兵器工場をたてていたといえます。青山学院キャンパスはのちに製鋼会社の跡地を入手したわけですが、清水は工場労働者の寄宿舎を改造して校舎としたのでした。春の季節、この土地にはたくさんの桜が咲いていた、そこで桜美林、桜の美しい林という校名ができたのですが、桜美林にはもう一つ、かつて清水安三が学んだオハイオ州の大学オベリン・カレッジを連想させるものがありました。オベリン・カレッジのオベリンは、普仏戦争後に故郷アルザスで、教会と学校、それに福祉活動に尽くした、ジョン・フレデリック・オベリンに由来しますが、確かに、オベリンは清水の生涯に重なるものがありました。

8. 日本のキリスト教大学の特徴

以上、日本のキリスト教大学の歴史を概観してみました。日本のキリスト教学校は、日本の開国後いち早く訪れた宣教師の私塾から出発しましたが、日本の有為の青年たちは西洋の学問をもとめて、積極的に宣教師のもとにやってきました。女性宣教師のもとには、日本の女性たちがやってきました。こうした非公式的な私塾に、海外の宣教団体の神学校の設立が加わり、都市部を中心にキリスト教学校が設立されていきます。そのキリスト教学校が、中等教育から高等教育へと充実させることによって、日本のキリスト教大学が成立していきました。大学の数を制限していた戦前においては、キリスト教学校の高等教育の多くは専門学校にとどまっていたのですが、戦後の新しい開放的な大学制度においては、一挙にその数を増やしていきました。現在、55校に上っていることはすでにふれたとおりです。

その日本のキリスト教大学の特徴をいくつか指摘しておきますと、日本のキリスト教大学は最初から大学として構想されたものは少なく、初等教育、中等教育、高等教育と、少しずつ教育機関を充実させて大学へと至ったことです。その結果、日本のキリスト教大学は、学校法人としては単独で大学であるのは少なく、中学や高校、さらには幼稚園、小学校を含む、いわば総合学園を構成していることです。青山学院でいえば、幼稚園、初等部、中等部、高等部、女子短期大学、大学、さらに専門職大学院を擁していますが、その結果、青山学院幼稚園に入って、青山学院に十数年間在籍して青山学院大学を卒業することも珍しくはありません。こうした総合学園では、相互の学校の間の協力関係を築いて一貫教育が試みられています。

また、日本のキリスト教大学の特徴として、早い時期から有力な日本人がキリスト教学校を支援する例が見られました。青山学院でいえば、先に触れた津田仙や本多庸一がその例ですが、その人々の多くは伝統日本の支配階級である武士階級の出身で、

明治新政府のもとで特権を奪われた彼らは、キリスト教とキリスト教学校とともに、日本の将来を切り開こうとしたのでした。教会においても学校においても、宣教団体の支援を受けつつ、比較的早い時期から自立への志向をもっていました。彼らの存在は、一面では日本のキリスト教と学校を日本社会に根付かせる役割を果たしましたが、他面では、宣教団体の方針と摩擦を起こす側面もあったことは否めません。

日本人キリスト者の自立志向は、宣教団体に頼らないキリスト教学校、キリスト教大学の設立が見られたことにも表れています。6歳でアメリカへの留学生となった津田梅子が、女子英学塾をはじめ津田塾大学の基礎を築いたこと、戦後には、戦前の中国で教育活動にあたった清水安三が、桜美林大学を始めたこともすでに述べました。このほかにも、会衆派の牧師成瀬仁蔵が、日本女子大学を設立していますし、プリンモアの卒業生で、日本YWCA幹事を歴任した河井道が恵泉女学園を創設しました。彼らはたしかに宣教団体の支援を受けませんでしたが、他面で、アメリカの教育、あるいはアメリカ人キリスト者に大きな影響を受けた人たちでもあります。また、津田や成瀬は、日本社会の有力者に知己が多く、彼らに支えられた側面もありました。日本の独立的なキリスト教大学としては、このほかにも、羽仁吉一・もと子夫妻の設立した自由学園、さらに戦後では、黒澤西藏の酪農学園大学などが注目されます。

日本のキリスト教学校は、戦後、占領軍の民主化政策を追い風にして再出発し、日本の再建と経済成長の時代に、着実な発展を遂げました。戦後すぐに十一の大学が設立され、戦後のベビーブーマーの成長に合わせて、60年前後に十五校、第二次ベビーブーマーの成長に合わせて、十校が設立されました。このようにキリスト教大学が日本社会に地歩を固めていったのですが、日本のプロテスタント教会は同じような発展を遂げたとは残念ながら言えません。大まかに言って、戦後の時点で、日本のプロテスタント人口は、20万人ほどでした。その後ゆるやかに上昇カーブをとり、二十五年後の70年ごろには50万近くになりますが、その後はさらにゆるやかな上昇となり、現在は60万ほどにとどまっています。カトリック人口を合わせて100万強、日本の人口比にして0.8パーセントにとどまっています。日本ではキリスト教学校は受け入れられたが、教会は受け入れられているとは言えないわけです。ですから、教会的基盤を欠如したキリスト教学校というのが、もう一つの特徴ということになります。

9. 今日の課題

現在、日本のキリスト教大学が直面している大きな問題は、従来追い風となった条件が失われた、いやむしろ逆風となっていることです。もっとも基本的な条件とし

て、日本の人口の構成があります。戦後の日本の大学が人口の増大とともに発展したことはすでに述べました。第一次ベビーブームの世代は、一年ではほぼ260万人、第二次ベビーブームの世代は200万人の子供たちが誕生したのですが、現在大学に入学する18歳人口は、120万ほどで、これが毎年減り続けています。現在は18歳人口の減少にも拘わらず、大学進学率が上昇していることから問題がそれほど顕在化していませんが、近い将来、大学志願者数の絶対的減少が始まると予想されています。とくに、地方都市は深刻で、地方都市を基盤とする小さなキリスト教大学、女子大学は存続の危機に直面しているといっても過言ではありません。そのためには、キリスト教大学としてのミッションをもう一度確認し、新しい方向を探っていかなければなりません。

明治の初年、開国によって西洋社会を知った日本人は、西洋の言語、文明の知識をもとめて宣教師をたずねました。彼らがキリスト教を受け入れた理由の一つに、文明国の宗教を受け入れて、日本を文明国としたいという強い動機がありました。また、第二次世界大戦後、帝国日本が偏狭な国家主義にとらわれて進路を誤ったことを反省し、民主日本として再出発したときも、アメリカン・デモクラシーを基礎づけるプロテスタンティズムへの関心がありました。キリスト教学校は立ち遅れていた女子教育に取り組み、男尊女卑ではなく、男女平等の家庭を提示し、多くの人々から好意をもって迎えられました。家父長家族のなかで、家長の指示で、家族の利益のためになされる結婚ではなく、当事者同士が親しくなり、結婚の誓約で新しい家庭を築くことは、キリスト教の外でも、日本の若者の理想となりました。キリスト教学校がクリスチャン以外の人々に支持されたのも、そうした西洋社会の自由な文化を教えたからです。

しかし、戦後日本の民主化から65年あまり過ぎ、日本も世界も大きな変貌を遂げ、キリスト教大学が掲げたかつての理想は、それなりに実現し、見方によれば古い理想ともなりました。日本のキリスト教女子大学が、男女の役割分担が明確であった家庭、「良妻賢母」といわれた理想の家庭婦人の育成を目指すものでしたから、男女平等が進み、女性の職場進出が著しい中であって、今日新たなヴィジョンが求められています。しかも、存在意義を問われるのは女子大学だけではなく、キリスト教大学一般に言えることです。今日の日本は開国直後の日本でも、敗戦直後の日本でもありません。現代では英語を学ぶのにキリスト教大学に行く必要はありませんし、アメリカを民主主義の教師と感じるひとも多くはありません。むしろ、キリスト教抜きで民主的政治制度を定着させた日本、経済成長を遂げた日本は、欧米の多文化主義の立場から、非キリスト教世界であるが故に、現代日本の達成が評価されないともかぎりま

せん。

とすれば、日本のキリスト教大学はかつてのミッションを現代に生かす道、新しいフロンティアを開拓しなければなりません。最近の女子大学の例でみれば、従来の家庭婦人の養成に加えて、看護学部などキリスト教的精神をいかす女性の職業分野のための学科が新設されています。あるいは、北海道の酪農学園大学における「神を愛し、人を愛し、土を愛する」農業の研究は、有機農法の研究など、地球環境問題に深くかわり、今日的な最先端の取り組みに寄与していることが注目されます。

戦後の日本の歩みからすれば、高度経済成長の時代は遠く過ぎ去り、70年代の石油危機後の安定成長の時代も終わり、この二十年近く、日本経済は低迷が続いています。日本は列島であることから比較的国境線が安定し、徳川幕府の鎖国政策もあり、言語も民族も文化も同質的な社会として知られています。それ故に、自然にナショナリズムが強く、戦前日本は世界の中での自国の地位の確保をもとめて強固な帝国への道を突き進み、戦後はアメリカの平和の下で、経済ナショナリズム、一国の繁栄を追求してきた歴史でした。しかし、最近グローバリゼーションのなかで、日本は世界の一国であり、世界の人々とともに共通の問題を抱え、お互いに学びあい、協力して問題解決に努めなければならないことが課題とされています。しかし、大学の留学生の受け入れ数の少なさをはじめ、世界の中で日本の孤立を示す数字が少なくありません。グローバルな視野を持つ世界市民の育成も、キリスト教大学の大きな使命といわなければなりません。

私自身の反省として述べれば、今回日本のキリスト教学校の歴史をたどりながら、キリスト教大学としては姉妹校にあたる、アメリカのキリスト教大学、また隣国の韓国をはじめアジアのキリスト教学校についての知識が不足していることを痛感しました。非キリスト教的文化の中でアジアのキリスト教学校はどのような問題に直面し、どのような役割を果たしたのか。さらに、今回のIAMUSC総会を機会に、アジアだけではなくラテンアメリカ、アフリカの諸国のキリスト教学校の存在も意識されました。日本のキリスト教学校自体が、日本一国だけの視野で物事を見ていたという反省があります。世界の造り主を主とあおぐ私たちこそが、人種も国家も文化も越えて、グローバル社会の一員として、世界中にネットワークと信頼のきずなを作り上げていく課題を与えられているように思います。

日本は昨年大地震と大津波によって二万人ほどの人命を失う経験をし、さらに原子力発電所の深刻な事故によって、広範囲におよぶ放射能汚染の危機に遭遇しました。自然災害と高度な科学技術の事故という二重の困難のなかで、人々の「きずな」があらためて問われました。日本人は古くからさまざまな地震、火災、台風、洪水などの

災害に遭遇し、忍耐をもって対処し再建する方法を身につけてきました。しかし、明らかに原子力事故は高度な人為的なミスに関わり、リーマン・ショックといわれた高度な金融システムの機能不全とそれに伴う経済危機と共通するものがあります。日本では、昨年の大災害後の「母の日」には、いつもの年よりも母に贈るカーネーションがよく売れたそうですし、結婚に踏み切ることになった若いカップルが増えたともいわれます。科学技術が高度に発展した社会も大きなリスクを抱えていて、そこでなくてはならないものが何かが実感されたからではないでしょうか。そこにキリストの福音が必要とされ、キリスト教学校の働きもまた求められています。

最後に、キリスト教学校の卒業生のなかから、現代日本でもっとも注目され尊敬されている一人の人物をご紹介します私の講演をおえたいと思います。その人は今年100歳にして現役の医師、聖路加国際病院の理事長日野原重明さんです。日野原医師はメソジスト教会の牧師で後に広島女学院の理事長も務めた日野原善輔牧師の二男で、関西学院中等部で学んだ後、京都帝国大学医学部に学ばれました。日野原医師はさまざまな面で日本の医療を新しく作り変えました。カナダの著名な医師オスラー博士を紹介して医師の職業倫理を示し、ライフプランニングセンターを設立して、予防医学に貢献しました。日野原医師はさらに日本で最初に終末期医療ホスピスに取り組みましたし、音楽療法をも手がけました。また、多数の健康指導書を書いて、多くの読者に迎えられました。

日野原医師のメソジスト的な背景を知る人は、その仕事が医療を通した隣人愛の実践であり、医療を通した伝道であると理解できるでしょう。また、日野原医師の仕事の特徴は、ひとつひとつの課題を、人々と協力して、組織的裏付けをもって進めていることで、予防医学のため、音楽療法の普及のためなど、さまざまなNPOを設立しています。NPOによって社会貢献するあり方自体が、アメリカのプロテスタント教会、メソジスト教会の伝統であることはいうまでもありません。日野原医師は偉大な例ですが、決して例外ではありません。たとえば、青山学院の卒業生には、社会福祉の分野で重要な貢献をされた阿部志郎先生がおられます。私も日本のキリスト教大学は、海外の姉妹校の経験とともに、日本のキリスト教学校が育てた卒業生たちの優れた仕事に学びつつ、新しい分野を切り開いていけるのではないかと存じます。